

第177回
日耳鼻長崎県地方部会学術講演会
【プログラム・抄録集】



令和7年4月12日(土)15時00分～

会場:長崎大学病院 第4講義室

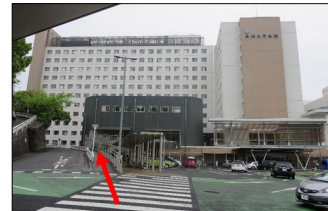
ご案内

【会 場】長崎大学病院 第4講義室

【緊急連絡】 耳鼻科医局：095-819-7349

耳鼻科病棟：095-819-7391

【駐車場】医学部駐車場を利用できます（無料）が、スペースに限りがありますので、長崎市内の方はできるだけ公共交通機関でお越しください。大学病院駐車場にも駐車することができますが、料金がかかります。（1時間あたり100円）



A地点から長崎大学病院を見たもの。
矢印の方向へ向かってください。



B地点：第4講義室入口（集合場所）
階段を上がり、ガラス扉からお入りください。

【受 付】会員カードによる受付を行います。専門医の学術集会参加単位
の受付も兼ねておりますので、会員カードをご持参ください。

一般演題 演者の方へ

【発表時間】 1題10分（発表7分、質疑3分）時間厳守

【発表PC】 Windows 11、PowerPoint 2019

＊ 事前に Windows PC で文字ズレ・文字化けの確認をしてください。

＊ データは USB フラッシュメモリ 等でご持参の上、開演15分前までに、所定の PC に保存し、動作確認を済ませてください。

【会長挨拶】15:00～15:05

熊井 良彦(長崎大学)

【一般演題Ⅰ】

15:05～15:35

座長 松瀬 春奈(長崎大学)

I-1 当科で経験した結核性リンパ節炎の2例
宮村 美典(佐世保市総合医療センター)

I-2 エンコラフェニブ+ビニメチニブ併用療法が著効した甲状腺未分化癌の1例
桂 資泰(佐世保市総合医療センター)

I-3 小児の乗り物酔いの頻度
野田 哲哉(野田耳鼻咽喉科)

【特別講演】

15:35～16:05

司会 熊井 良彦(長崎大学)

光免疫療法(頭頸部アルミノックス治療)

演者: 西 秀昭

(共催 楽天メディカル株式会社)

【一般演題Ⅱ】

16:05～16:15

座長 熊井 良彦(長崎大学)

Ⅱ-1 当科における光免疫療法(頭頸部アルミノックス治療)の経験
西 秀昭(長崎大学)

【令和5年度日耳鼻長崎県地方部会総会】16:15～16:30

司会 西 秀昭

1. 会計報告
2. 連絡事項

【令和6年度日耳鼻全国会議代表者会議報告】16:30～17:10

- | | |
|---------------|--------|
| 1. 保健医療委員会 | 隈上 秀高 |
| 2. 学校保健医療委員会 | 佐々野 利春 |
| 3. 乳幼児医療委員会 | 神田 幸彦 |
| 4. 福祉医療委員会 | 海江田 哲 |
| 5. 医事問題委員会 | 江上 直也 |
| 6. 産業・環境保健委員会 | 梅木 寛 |
| 7. 専門医制度 | 熊井 良彦 |

【一般演題】

I-1 当科で経験した結核性リンパ節炎の2例

○宮村美典、北岡杏子、澤瀬光佑、安達朝幸、桂 資泰(佐世保市総合医療センター)

結核の多くは肺に発症するが、肺外結核として胸膜、頸部リンパ節、腸、脊椎等に病変を生じることがある。結核性頸部リンパ節炎は、肺に結核病変を認めず、結核検査も陰性で診断に苦慮することが多い。近年、日本人の結核罹患数は減少しているが、若い在留外国人の罹患数が増加しているとの報告がある。今回、在留外国人に発症した結核性リンパ節炎を2例経験したので、報告する。

症例1は27歳、フィリピン出身の女性。1か月から繰り返す右頸部腫瘤を主訴に当科を初診した。CTや細胞診を施行したが明らかな悪性所見はなく、猫ひっかき病などの感染性が疑われた。その後自然軽快したため、近医で経過観察とした。しかし当科終診から1年後に再燃を認めたため再度精査目的で紹介となり再検したCTで左上葉に粒状影を認めた。肺結核を疑い呼吸器内科にコンサルトを行った。インターフェロンγ遊離試験(IGRA 検査)陽性、リンパ節穿刺液から結核菌が同定され、結核性リンパ節炎と診断した。呼吸器内科にて、抗結核薬の治療を完遂した。

症例2は33歳、ベトナム出身の男性。2週間前からの左頸部腫脹と疼痛を主訴に受診した。CTでは石灰化を伴う頸部リンパ節腫大を認め、IGRA 検査陽性であったことから結核性リンパ節炎を疑った。リンパ節穿刺液から結核菌は検出されなかったがリンパ節生検の検体から結核菌核酸同定(TRC)陽性であり、結核性リンパ節炎の診断に至った。呼吸器内科にコンサルトを行い、抗結核薬での治療を行った。この患者は過去に同様の症状に対して、母国で抗生剤の使用歴があり、耐性株の可能性を考慮し治療を行ったが、治療開始から5か月後に頸部腫瘤の再増大を認めた。リンパ節穿刺液から再度結核 TRC 陽性の結果を認め、さらに抗結核薬を追加して加療中である。

日本の結核罹患率は2021年から結核低蔓延国の水準を維持している。しかし、20～29歳で新登録結核患者数は増加しており、これは主に外国出生結核患者の増加によるものである。外国出生新登録結核患者の出生国はフィリピンが最多で、以下、ベトナム、インドネシアなどが多い¹⁾。長崎県の外国人労働者数は3年連続増加傾向であり、今後職場を通しての感染の可能性も否定できない。若い外国人や、接触歴のある頸部腫瘤の患者を診察する際には、結核性リンパ節炎も念頭に入れる必要がある。

参考文献

- 1) 公益財団法人結核予防会結核研究所疫学情報センター:2023 年結核年報の概況,
<https://jata-ekigaku.jp/>

I-2 エンコラフェニブ+ビニメチニブ併用療法が著効した

甲状腺未分化癌の1例

○桂 資泰、安達朝幸、北岡杏子、澤瀬光佑、宮村美典（佐世保市総合医療センター）

【始めに】甲状腺未分化癌（Anaplastic Thyroid Carcinoma: ATC）は1年生存率が5～20%程度と極めて予後不良で従来は拡大切除、放射線外照射、殺細胞性抗がん剤による集学的治療を行なうべきか、best supportive careを行なうべきかの判断に迷うことも少なくなかった。しかし近年レンバチニブを嚆矢とした分子標的薬の登場により長期生存例も認められるようになり、特にATCではBRAF V600E 遺伝子異常が高頻度に認められることから2023年以降本邦でもBRAF/MEK 阻害薬が保険適応となっている。今回 BRAF V600E 遺伝子変異陽性 ATC に対しエンコラフェニブ+ビニメチニブ併用療法が著効した症例を経験したので報告する。

【症例】81才 男性

【既往歴】高血圧、高尿酸血症

【現病歴】2ヶ月前からの咽頭違和感と頸部腫脹が出現し甲状腺腫瘍を疑われ当科紹介。甲状腺右葉から右頸部にかけて一塊となった可動性不良の腫瘍性病変を認めたが声帯の可動性は保たれていた。造影CTでは甲状腺右葉に約5cmの不均一に造影される腫瘍を認め胸鎖乳突筋および椎前筋への浸潤も疑われた。また右内頸静脈内に腫瘍塞栓あり右総頸動脈には明らかな浸潤はないものの周囲1/4に腫瘍が接しており両肺に転移を疑う小結節が散在していた。

【治療経過】細胞診では未分化癌が疑われる結果であった。根治切除は不能でレンバチニブは出血のリスクが高いと判断しBRAF/MEK 阻害薬使用の可能性を考え局所麻酔下に甲状腺生検とオンコマイン提出を行なった。検査結果は甲状腺未分化癌 cT4bN1bM1 cStage IV C とBRAF V600E 遺伝子変異陽性の報告が得られたが結果報告までの待機期間中にも画像上急速な進行が認められた。初診から5週後よりエンコラフェニブ+ビニメチニブ併用療法を開始したところ腫瘍は原発巣、転移巣とも急速に縮小しG1の肝障害の他は特記すべき有害事象は認めず投与開始から6ヶ月を経てPRを維持し投与継続中である。

【考察】BRAF V600E 遺伝子陽性 ATC に対する BRAF/MEK 阻害薬は甲状腺腫瘍診療ガイドライン 2024 においてエビデンスの確実性は B(中)で強く推奨するとされており効果が期待されている薬剤である。一方で使用には事前の遺伝子診断が必須であるため、できるだけ早期に生検を計画し気道閉塞など致命的な合併症をきたす前に BRAF/MEK 阻害薬投与を開始することが求められる。

【参考文献】

Tahara M, et al.: A Phase 2 Study of Encorafenib in Combination with Binimetinib in Patients with Metastatic BRAF-Mutated Thyroid Cancer in Japan. *Thyroid*. 2024; 34: 467-476.

I-3 小児の乗り物酔いの頻度

○野田哲哉(野田耳鼻咽喉科)

乗り物に酔いやすい者が多いのは、男性では10～15歳で、女性では10～18歳であるという報告を行ったことがある。今回は乗り物酔いの頻度の詳細な調査を行い、小児の頻度が変動する理由を考察したので報告する。

2002年9月から2025年1月までに当科を受診した患者の中で、問診表にある「乗り物に酔いやすいですか。」の質問に「はい」または「いいえ」と答えた2歳から15歳までの者を対象とした。対象者は男性が4,756名で、女性が4,845名であった。男女別で年齢ごとに「はい」と答えた割合を調べた。

男性では「はい」の割合は2歳が1.3%で、年齢が上がるにつれ高くなり、13歳で31.8%と最高値となり、15歳では24.9%となった。女性では2歳が1.9%で、同様に高くなり、12歳で39.8%と最高値となり、15歳では33.0%となった。

「はい」と答えた者が1歳の女兒に1名いたが、0歳と1歳には酔いやすい者がほとんどいないと判断して対象から除外した。乗り物酔いは平衡中枢と嘔吐中枢周辺の神経ネットワークの発達に関与し、それが巨大で複雑な者ほど酔いやすいと推察している。脳機能の発達中には慣れの現象が起こりにくいと考えられ、男性では13歳まで、女性では12歳まで発達があることが示唆された。その年齢を過ぎて頻度が低くなっているのは慣れの現象のためであろう。女性では男性より慣れの現象が起こりにくいと考えられた。今回の調査の対象外であるが、16～19歳の頻度は男性では19.1%で、女性は33.9%であったことも参考となる。体平衡では重心動揺検査の結果が13～15歳で成人並みとなり、眼球運動ではsaccade(衝動性眼球運動)が15歳まで発達するという報告がある。乗り物酔いには体平衡や眼球運動と同様に小児期の脳機能の発達に関与すると考えられた。

【参考文献】

- 1) 野田哲哉: 乗り物酔いの年齢別頻度. 耳鼻 2010; 56: 15-18.
- 2) 野田哲哉: 前庭障害に伴う嘔吐の機序. 耳鼻 2024; 70: 215-222.

Ⅱ-1 当科における光免疫療法(頭頸部アルミノックス治療)の経験

○西 秀昭、高島寿美恵、前田耕太郎、森 彩加、大野純希、中村真優子、熊井良彦
(長崎大学)

光免疫療法(頭頸部アルミノックス治療)はEGFRモノクローナル抗体であるセツキシマブと光感受性物質 IR700 を結合させた抗体-光感受性物質複合体を静脈注射し、690 nm のレーザー光を照射することによって薬剤が付着した細胞を特異的に破壊する治療である。米国と本邦での臨床試験の結果を受けて、本邦では切除不能な局所進行または局所再発の頭頸部癌を対象として 2021 年 1 月より保険診療として治療が開始され、『第 5 のがん治療』として注目されている。

今回我々は長崎県で初めて光免疫療法を実施したので、治療の実際について紹介する。

症例は 74 歳男性。下咽頭癌(左梨状窩、扁平上皮癌、cT4aN3aM0)に対し咽喉摘、両頸部郭清、遊離空腸による再建術を施行、術後 CRT を経て、経過観察を行っていたが、CRT 後 3 年目に舌根部に再発が認められた。再発病変に対し、内視鏡的咽喉頭手術(ELPS: endoscopic laryngopharyngeal surgery)による切除を検討したが、MRI 上、一部粘膜下層を越えた進展が疑われ、実際に全身麻酔下に上部消化管内視鏡で病変の確認を行ったが、ELPS での切除は不能と判断された。咽喉摘後(再建術後)であり、また術後 CRT の照射範囲内のため瘢痕が強く、十分な安全域をとった切除や再建も困難な状況であり、光免疫療法が行われることになった。実際の治療は国立がん研究センター頭頸部外科の篠崎先生を招聘し、指導を受けながら実施した。まず、手術前日に薬剤の投与を行い、翌日の手術では FK-WO リトラクターを使用し術野を展開し、フロントアルディフューザー及びサイドファイヤーディフューザーを駆使し病変全てにレーザー光が照射されたことを確認し手技を終了した。

治療後の経過は特に大きな問題はなく、病変は消失、治療前にあった疼痛も消失した状態で 3 か月経過している。

まだ始まって間もない治療法であるため、大規模な症例集積や長期の経過観察の結果は出ていないが有用性を示す症例報告がされており、頭頸部がん治療における新たなオプションとして当科でも積極的に取り入れていく予定である。

参考文献

- 1) Omura G, et al.:Transnasal photoimmunotherapy with cetuximab sarotalocan sodium: outcomes on the local recurrence of nasopharyngeal squamous cell carcinoma. *Auris Nasus Larynx*. 2023; 50: 641-645.
- 2) Okamoto I, et al.:Photoimmunotherapy for managing recurrent laryngeal cancer cervical lesions: a case report. *Case Rep Oncol*. 2022; 15: 34-39.